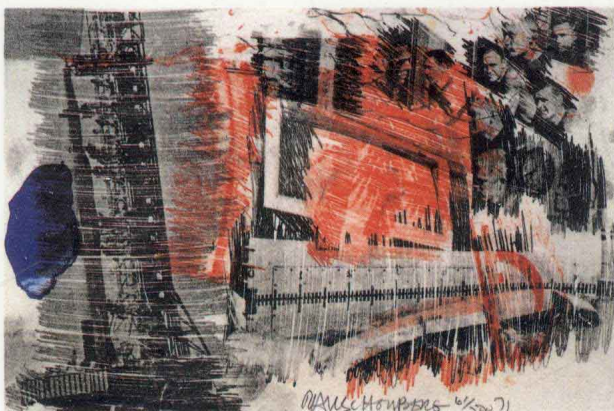


現代アメリカ文学叢書 ⑧

罪深き愉しみ

ドナルド・バーセルミ
山崎勉十・中村邦生 訳



Donald Barthelme
Guilty Pleasures

現代アメリカ文学叢書 ⑧

Donald Barthelme
Guilty Pleasures

罪深き愉しみ

ドナルド・バーセルミ 山崎勉＋中村邦生訳

ドナルド・バーセルミ (Donald Barthelme)

1931年フィラデルフィアに生まれる。ヒューストン大学卒業。

新聞記者・編集者等を経て1960年代前半から「ニューヨーカー」誌を中心に活躍。

ポストモダン・メタフィクション作家として現代アメリカ文学の担い手となる。

1989年没。

山崎 勉 1927年、福井県に生まれる。東京大学文学部卒業。現在、専修大学教授。
訳書にD・レッシング『暮れなずむ女』（三笠書房）、M・タッカー『アフリカ
——文学的イメージ』、D・バーセルミ『口に出せない習慣、不自然な行為』（共
訳）（以上、彩流社）などがある。

中村邦生 1946年、東京都に生まれる。立教大学大学院博士課程修了。現在、大東
文化大学教授。著書に『くさよなら』の事典』（共編著）、『くつまずき』の事典』
（編著）（以上、大修館書店）など。訳書にL・ダレル『逃げるが勝ち』（共訳、晶
文社）がある。

罪深き愉しみ

現代アメリカ文学叢書⑧

1995年4月1日 発行

定価は、カバーに 表示してあります

著 者	D・バーセルミ
訳 者	山 崎 勉 中 村 邦 生
発行者	竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 振替・東京9-55239

組版 ポイント・ナイン

印刷 (株)平河工業社

製本 (有)青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-342-3 C0097

ジョン、ピート、そしてスティーヴに

本書の諸篇はさまざまな折に種々さまざまな刺戟や過剰なまでの刺戟に應じて書いたものである。最初の三分の一は、あらましパロディだ。パロディを書くことは一般に弁解がつきものである。というのもパロディは文学活動の格付けのなかで、盗作より辛うじてやや上位にある不面目な活動であるからだ。最小限要求されることはパロディの対象が世間周知のものであるということである——いわば十七世紀オランダのチューリップ栽培の熱狂的流行のように。これによってパロディストは己のしている仕事は有益なものだという贅沢な実感が得られるのだ。また何篇かはさる特定の政權に向けられた政治的な風刺である。この政權は各人各様の方法で解釈を試みることができるが、しかし感応精神病で片づけるのではおそらくあまりに樂天的だし、だからといってわれわれが分相応のものを手にしているとはどうも信じたくないのである。だからここにできあがった作品は、思うに、われわれの政治的生活の肥大化と不可思議さに驚き呆れた素朴な表現と類別されるにちがいない。

他の諸作品はしばしば五人の人間によって六つの筋から提供された情報と関係がある。古色蒼然たる寓話もあれば似非ルポルタージュもあり、またあるものは絵を切り抜いたり貼り合わせたりする愉しみ、公開されてしまった秘密の悪癖への遁辞である。罪深き愉しみ、これに過ぎるものはない。

目次
罪深き愉しみ

目次

第一部 7

なにからなにまで年鑑で 9

発行者への手紙 19

例のコスモポリタンふうの女 29

ウーージェニー・グランデ 37

ピシャツ ピシャツ 55

怒れる若者 65

太陽は自棄^{やけ}っぱち——ミケランジェロ・アントニオーニのためのシナリオ 77

ドン・Bの教義——ヤンキーの認識法 89

第二部 103

鵜呑み 105

若き妨問者 111

宮殿 119

ドラゴン 127

デラウェア河岸での逡巡 135

王宮処置 141

ミスター・フルファームズ・ジャーナル 149

第三部 159

ヘリオトロップ 161

さあエド・サリバン・ショーに御声援を！ 167

バニー・イメージ、その喪失——ビッツィ・Sの症例 179

探険 189

ゲームは美と真実と眠りの敵よ、とアマンダは言った 203

タイヤの国 215

開幕二時間前 229

写真 235

無——予備録 247

訳者あとアがき 255

再刊のあとがき 265

第一部

なにからなにまで年鑑で——*Down the Line with the Annual*

『暮らしの手引き』は、消費者問題、消費者教育、経済学、家政学、商業、公民論、マーケティング、社会学、生活科学、物理学、及びその他の商業教育科目や科学教育科目の教科課程で大いに利用されています。高校・大学の若い消費者が商品とサービスに通じた賢明な購買者となり、品物の確かな品質を見る目を身につけるよう教えるさい、価値ある資料を提供するのです。

『暮らしの手引き年鑑』

キャンデイシーはぼくといっしょに出かけ——オーストラリアの島々で完全無欠な暮らしを見つけるだろうか？ それはまだ何とも言えない。とにかくぼくたちは目下、スウェーデンのテニス・ボールの件に悩まされつづけている。ぼくがおそろおそろ地下室へおりていくと、キャンデイシーが、スウェーデンのテニス・ボールでいっぱいになった洗濯機の前で、ひざまずいていた。涙を浮かべたキャンデイシー。ぼくは彼女の手をとった。「どうしたんだい？」ぼくは言った。「ああ、チャールズ」彼女は言った、「何もかもおじゃんね？ 何もかも？」ぼくはちよっと考えた。それ

から、「きみは『年鑑』を読んでいたんだな」と言うと、彼女は目をそらした。「このスウェーデンのテニス・ボールは洗濯機で洗って、乾燥機で乾かしても悪影響はありませんって書いてあったんですもの。試してみずにはいられないでしょう？」洗濯機にはあまり役に立たない糸くずフィルターがついているが、そのことにぼくが気づいたのは、先週、ダクロン五〇パーセントと装飾用黄鉄鉱五〇パーセントの新品のマットを洗ってつまらせてしまったときで、そのマットは例のいかめしくて権威ある年刊の『年鑑』にまず当たってみもしないでキャンデイシーが買ったものだった。もっとも、キャンデイシーはエアゾル・ヘアー・スプレー（一五ページ）の使い過ぎで肺が炎症を起こし、塗ったら消えない口紅（一七ページ）の使い過ぎで口唇が不愉快に乾き、瘡ができて苦しんでいたのだから、責めるわけにはいかない。「きみを責めたりしないよ、キャンデイシー」ぼくは言った。「あの学費ばかりかかる東部の女学校でろくな教育を受けなかったせいなんだから」黄鉄鉱の微片が彼女の金髪の中で微動している。「何もかもおじちゃんになっちゃって」彼女は呟いた。「学校でヘロドトスやサン・シモンやリルケやオーウェン・ウィスターなんか読んだり、人格の神秘と歴史の謎を解こうとしたりして、ふらふらとばかみたいに時間を過ごしていなければ、わたしだって商品とサービスに通じた賢い購買者にきつとなっていたはずだわ。それだけのことよ」そして彼女の目は欠陥のあるコンタクト・レンズ（五〇ページ）のせいで、鈍い光をたたえていた。

ぼくは急いで彼女をアイスクリーム・パーラーに車で連れ出し、象の足の形に似たシャーベットを二人してたらふく食べた（有害な食品添加物がいっぱい含まれてはいたが）。だがまだ問題がある。ぼくたちは加速度的に崩壊しつつあるゆとりも楽しみもない世界を漂流している。四方八方か

ら迫りくる分裂の脅威を阻む手だてはないのだ。枕元の時計が良い例だ。「チクタクの音の大きさをチェックすること」と『年鑑』に書いてあった。ぼくはチェックした。チクタク。チクタクの音はお上品に思えた。そいつを家に置いたとたん、B-58みたいな轟音がしたのだった。キャンディシーはどうなることかと時計を眺める、隣近所から文句がでる、警察から電話がかかる。さらに一四三ページの罐を開けるとときに細かい金属の屑を撒き散らしてしまう電気罐切り。一七八ページの上糸のダイヤルテンションに目盛りがなく、カムが想い描いた通りの模様にならないミシン。そう、みんなぼくの買ったものだ。「テレビを見ると永久に目が悪くなってしまおうと信ずる根拠はありません」と『年鑑』にある。(脳味噌への危害はどうなんだ?)「良いトースターは何年使っても一枚一枚むらなくキツネ色に焼き上がります」だがぼくの買ったトースターはぼくたち夫婦に由々しい感電の危険しか与えなかった。本当言うと、ぼくはベッドからずり落ちるナイロンのシート(二二一ページ)、ひどく悠長に乾燥する粗悪なインク(五七ページ)を買わされてしまったのだった——ぼくの書く字は封筒じゅう中世の聖人の筆跡みたいに滲んでしまったのである。

「約五百万人の女の子たちが、ソフト・ドリンク、ポテト・チップ、ピザ、キャンディー、ハンバーガー、ワッフルといったもっぱら軽飲食で生きているものと推定されます」その女の子たちとは誰なんだ? 名前は何という? どんな様子をしている? どうやって連中と連絡をとったらいのだろう? そして「見た目にはおいしそうですが内容的には怪しげな食物」を燃料にして、どう動きまわっているのか? キャンディシーは彼女らに牛肉の赤身を粗末な茶色の包み紙にくるんで送りがっている。冷蔵庫が牛肉でいっぱいなのだ。(だがうちの冷蔵庫はどだい信用がおけな

い。発作的に温度が上がって焼き肉にしてしまうくせがあるので。正直言つて、ぼくは神経が疲れた、今のアメリカはもうぼくにはわからなくなつてしまつたからだ。ぼくはオーストラリアの島々へと立ち去るつもりだ、というの**も**ぼくの刻み煙草は一九六八年にコネティカット農業試験所によつて鉛と砒素の含有率が一番低いと判定された種類のものだけれども、銀のパイプ・クリナーにはシアン化物が含まれているし、ぼくの食べるオレンジはコールド染料で色づけされているからだ。ぼくのスチーム・アイロンは注入口から熱湯が噴きこぼれ、**厨房処理機**はとうもろこしの皮をうまく噛み砕かないし、ステレオは音のひずみ、再生むら、ゴウゴウいう音やブーンという唸り声でめまいを起こしている。酸性の水が台所の流しや便所や浴槽のつやつやした表面を少しずつ腐食し、そのあげくいったい持ち主をどういう目にあわせるのか誰にもわかりやしない。二重ガラスの窓はガラスとガラスの間に水滴がたまつてしまふし、ピアノのハンマーの間では蛾やカツオブシムシが活躍している。三馬力の回転式雪掻き機はひどい代物だ。「雪は粉状の霽となつて飛び散り、それが後ろの運転者に吹きかかつた」と『年鑑』にあるが、まさにそのとおりだった。試運転をしてもどつてきたとき、まるでぼくはラップランド人みたいな姿になつていたのである。見ると、かき残した雪が自動車や、りんごの木や、郵便物を取りに外に出たキャンデイシーに吹き寄せている。だがぼくは手紙を書いている最中なので、彼女にかまつていられない。『年鑑』が助言してくれているとおり、製造元と、連邦取引委員会と全国商取引改善機関とニューヨーク州の法務長官への激怒の手紙だ。この世は、たるみ、からまり、剥げ落ち、割れ、小さな玉になり、ぴゅうぴゅう飛び交い、へこみ、ゆがみ、ひびが入り、色あせ、欠け、砕け、黄ばみ、漏れ、気が抜け、